

青森県津軽方言の文末詞の取り扱い

大槻知世

(東京大学大学院)

1 はじめに

本発表では、津軽方言の文末詞の分析を考察する。ちなみに、文末詞とは終助詞とほぼ同義であり、文の終わりにおいていわゆる感動や強意などの様々な意味を添える品詞だが、この用語を提唱した藤原与一(1982 : xvi, 4 - 5)は、文末で機能する品詞であることを明確にするためと、また、それ自体で訴え(話し手の感情の表出だけでなく、聞き手¹に対する待遇を含むようである)という機能をもつ単独の品詞である(それゆえもはや「助詞」ではない)ことを明示するために文末詞と名付けた。発表者も藤原の挙げる上記の理由を支持し、本発表では用語を文末詞に統一する。

2 対象言語

青森県西部で話されている津軽方言を対象言語とする。東條(1938 : 28 - 45)の分類に従うと、本土方言の中の東部方言、さらに東北方言、その下位の北奥方言(青森・秋田北部・岩手北部の方言)に属する。

語順は日本語諸方言・諸語と同じく SOV で、膠着語的である。当方言の音素目録は巻末に附す。

3 調査方法・話者情報

本発表のデータは、主に2012年12月に青森県南津軽郡田舎館村(いなかだてむら²)で録音した自然談話から得た。話者(言語形成地/居住歴)は、70歳代女性A氏(黒石市/20歳頃から調査時現在まで田舎館村)、70歳代女性B氏(南津軽郡藤崎町/16歳頃から調査時現在まで田舎館村)、60歳代女性C氏(聞き取りを失念したため不明)。親しい友人であるこの3名の談話を筆者が同席し約1時間半録音した。

さらに、2011年7月に録音した同じ話者の談話資料も参照することがあるが、この談話資料の話者は、先の70歳代女性A氏、B氏であり、上掲のデータと同じ性質のデータであると考えられる。また、B氏のお孫さんである30歳代女性D氏(田舎館村/居住歴は不明)が聞き役を務めてくださった。こちらの談話資料の録音時間も約1時間半である。

なお、例文の共通語訳は、特に断りのない限り筆者によるものである。共通語訳は方言に忠実にしたつもりだが、逐語訳というわけではなく、意識を含む。訳の中で、文脈から補う必要があると判断した要素は括弧に入れて付け加える。さらに、文脈や話題を角括弧に囲って付け加えることがある。

¹ 本発表での聞き手は、発話行為参加者としての聞き手を指す。本稿では発話行為に参加せず談話に耳を傾けている存在(いわば談話における第三者)を聞き手と称することはない。

² 同村は、津軽地方の政治・文化の中心であった弘前市の西隣にあり、日本海側を走る五能線の終着駅を擁する。

4 先行研究

現代日本語共通語（以下、共通語）が通言語的に見て文末詞に富んでいることは周知の通りであり、日本語の諸方言についても、共通語にも増して豊富な文末詞を有することが指摘されている（井上 2006 : 137）。諸方言の例と同様に、津軽方言も文末詞を多く示し、独特の音形と機能が研究者の注目を集めてきた。これまでに文末詞（あるいは終助詞）として扱われてきた形式には次のようなものがある（一部）。

(1) オン、ガ、キヤ³、サ、ジャ、ズ⁴、ド、ナ、ネ、ノ、バ、モノ⁵、ヤ、ヨ

上記の中でも、たとえば津軽方言の疑問文では、疑問詞疑問文の場合は文末詞「バ」が、単純疑問文の場合は「ナ」が現れ、両者が相補的に分布していることが、沢木（1981 : 96）の報告⁶以来知られている⁷。

また、自身も五所川原市方言（津軽方言の下位分類の一つ。北津軽郡の方言）の話者である田附（2011a : 52-53）によると、「ナ」「バ」の本質的な用法は、不定の要素を聞き手に問いかけることにあり、基本的に独り言では用いない⁸。これに対して、独り言でも用いる「ガ」は、不定の要素を単に表明するのに留まるものである。つまり、「ナ」「バ」と「ガ」とは、聞き手に問いかけるという意味での問いかけ性の有無において対立している（田附 2011b : 145。下の例(2)は田附 2011b : 136 の (14) を修正。適格性の判断は田附による）。

(2) ワ キナ クスリ ノンダ{ガ\/*ナ}「俺、昨日薬飲んだっけ？」（田附 2011b : 136）

(3) *ワ キナ ナニ ノンダバ「俺、昨日何飲んだっけ？」（作例）

つまり、「問いかけ性の有無」と「単純疑問文か疑問詞疑問文か」という二つの軸で疑問文を四つに分類した場合、疑問詞疑問文か単純疑問文かに関わらず問いかけ性が無ければ「ガ」を、問

³ この「キヤ」は[kja ~ kkja]で実現するため、厳密には「(ッ) キヤ」のように促音の出没を反映させた表記が妥当だが、現時点では表記を簡素にするため「キヤ」を用いる。なお、促音の出没には形態音韻規則が関わると思われるが、形態音韻規則の解明は音韻規則とともに今後の課題である。

⁴ この「ズ」は[zui ~ nzui]で実現するが、先の脚注 3 と同様の理由から、表記は「ズ」を用いる。

⁵ 実現形には「モン」もあり、mono > mon（語尾音消失 apocope）が想定できる。さらに、「モノ」と「モン」はどの文例でも置き換え可能であった。これゆえ、「モン」は「モノ」のバリエーションとする。なお、「オン」も由来は形式名詞「モノ」にあるとされる。しかし、「オン」の文例には「モノ」（または「モン」）に置き換えられないと思われるものがあるため、「オン」についてはこれを別立てとした。

⁶ 沢木（1981）の調査地は、江戸時代まで弘前藩津軽家の都であった弘前市と、五所川原市にほど近い金木町である。弘前市方言を津軽方言の「標準語」と見る話者も多い。

⁷ 「バ」についてはこれ以前にも、既に北山（1933 : 第八章IV終助詞）や此島（1968 : 156）らが、疑問の意味を強めるものとして記述しており、「バ」の存在自体は既に紹介されていた。しかし、これを「ナ」と対立させることで、当方言の疑問文の体系の一端を示した先行研究は、管見の限りではやはり沢木が初めてである。

⁸ ただし、「バ」の〈感嘆〉用法は独り言でも用いることができる。次の例は発表者による津軽方言の作例である。

(ア) [一面に紅葉した山々を山頂から眺めて] ナンボ キレンダバ「なんてきれいなんだろう！」（作例）

ちなみに、山形市方言にも文末詞「バ」があり、こちらは平叙文において驚きを標示する機能があり、DeLancey が驚きを表すモダリティとして提唱した mirative の一種かとも考えられるようである（渋谷勝己先生、私信）。ただし上の津軽方言の「バ」と異なり、山形市方言の「バ」の要点は、（話し手も驚きはしたが）聞き手が聞くときくと驚くだろうと話し手が見なす情報を標示することにある（渋谷 2004 : 173）。

いかけ性が有り、かつ単純疑問文であれば「ナ」を、そして問いかけ性が有って疑問時疑問文であれば「バ」を用いるという、次の表のような対立構図を持つ。

表 1 五所川原市方言（津軽方言の下位分類）の疑問文における文末詞の分布

	問いかけ性有り：質問	問いかけ性無し：疑い
単純疑問文	「ナ」	「ガ」
疑問詞疑問文	「バ」	

質問と疑いとを別の形式で標示するという現象は、共通語だけを見てはなかなか感知することができないものである。しかし、たとえば中国語では疑いを文末助詞 *ne*（呢）という問いかけ性のない形式で表す（木村・森山 1997：253 - 257）という現象があるように⁹、通言語的にも質問と疑いを表し分ける現象が観察される。つまり、共通語を観察しているだけでは気づきにくいけれども必要な区別を、方言の文末詞の研究によって抽出することができ、それによって方言学一般や共通語の研究にも寄与することができる（田附 2007：71）。

5 その他の文末詞：伝聞の「ド」

♪「桃太郎」語りの三段階：竹バージョン（共通語文を方言にほぼ逐語訳したもの）

語り部：伊奈かっぺい（青森県津軽地方出身のタレント）

※準音声表記で、音韻的な表記を一部混ぜた（/s,h/の直後で中和する i と u の区別を視覚化するため、等）。

- 1 ムガーシムガシ アルドゴサ ジサマド バサマ イダンダド
- 2 ジサマ ヤマサ スンバカリニ バサマ カワサ センタグニ イッタランダド
- 3 バサマ カワデ センダグ シテラッキヤ カワカミガラ デッターラダ モモッコ ナガイ
デキタンダド
- 4 バサマ ソノモモコバ フラッテ イエサ モンドッタド
- 5 バンカダニ ナッテ ジサマ イエサ モドッテ キタハンデ フタリシテ ソノ モモコ
バ クーキガッテ マナイダノ ウイサ モモコバ オイデ キル キガッタッキヤ モモ
コア パカット ワイデ ナガガラ メゴイ オドゴワラスア デハッテ キタンダド
- 6 ジサマド バサマ ドッテンシタバッテ モモガラ ウマイダンダハンデ モモタローズ
ナマエッコバ ツケデ ダインジニ ダインジニ ソンダデダンダド

⁹ ただし木村・森山（1997）では、命題内容に対する認識が不十分（不確定）であるとの意味を込めて、疑問文を「不確定情報文」と呼ぶ。さらに、問いかけ性が無いことを、聞き手の持つ情報に依存しないという意味で「聞き手情報非依存」と呼んでいる。このため厳密には、*ne* は不確定情報文において聞き手情報非依存を表す、といった言い方がされている（木村・森山 1997：253 - 257）。ちなみに、疑いを表す津軽方言の「ガ」と中国語の *ne* は下降調をとることもあれば、語用論的に質問を表しうるがために上昇調もとることができるという共通点がある（田附 2007：63、木村・森山 1997：251）。

漢字かな混じり表記（松バージョン：共通語文を方言のイントネーションで語る）

- 1 昔々あるところにおじいさんとおばあさんがおりました。
- 2 おじいさんは山に芝刈りに、おばあさんは川に洗濯に行きました。
- 3 おばあさんが川で洗濯をしていると、川上から大きな桃がどんぶらこどんぶらこと流れてきました。
- 4 おばあさんはその桃を拾ってお家に帰りました。
- 5 夕方になって、おじいさんが山から帰ってきたので、二人でまな板の上に桃を置いて切ろうとしたら、桃がぱっと割れて中からかわいい男の子が出てきました。
- 6 おじいさんとおばあさんはびっくりしましたが、大喜びで、桃から生まれたので、桃太郎と名前を付けて大事に育てました。

6 田舎館村の談話資料から

発表者の調査した田舎館村でも、先の表 1 と同様の分布を示している。(4)(5)は単純疑問文の「ナ」、(6)(7)は疑問詞疑問文の「バ」の例である。

- (4) エー シオガラ イエニ イデ ツグルダナ
ee siogara ieni ide cugurudana
 e siokara ie=ni i-te cukuru-n=da=na
 INTJ 塩辛 家=LOC いる.INF-SEQ 作る-NMLZ=COP=SFP

「えー、(イカの) 塩辛を家で作るの？」[客に自家製の塩辛を出した時の話] (2012)

- (5) カダサ チューシャ シテキタナ
kadasa cjuusja sitekitana
 kata=sa cjuusja si-te-ki-ta=na
 肩=ALL 注射 する.INF-PTCP-くる.INF-PST=SFP

「肩に注射してきたの？」(2012)

- (6) ナニ カヘルダバ
nani kaherudaba
 nani ku-aseru-n=da=ba
 何 食べる-CAUS-NMLZ=COP=SFP

「何を食べさせてくれるんだい？」[「良いものを食べさせてやろう」と言われたので] (2012)

- (7) K ダバ ダイダバへ¹⁰
Kdaba daidabahe
 K=da=ba dare=da=ba=he
 (person name)=COP=ADVC 誰=COP=SFP=INTJ?

「Kって誰なのよ？」[先行する文脈で聞き手の言った人名が(7)の話し手には初耳だった]

ここで特筆したいのは、疑問文において「ナ」と「バ」が義務的ではないということである。適格性に程度差はあるものの、とりわけ例(5)の「ナ」と(7)の「バ」以下は無くても疑問文として同じ意味をもつ。要するに、「ナ」と「バ」は疑問文に随意的に現れる。

¹⁰ この「へ」は、疑問文（疑問詞疑問文・単純疑問文ともに）と命令文の末尾に出没する。命令文に生じる場合、北山（1933：第八章IV終助詞）に「雅語」とあり、菅沼編（1936：29）も「花を咲がせでみへ。（花ヲ咲カセテミヨ。叮嚀）」と記述しているように、強権的な命令にはならないようである。疑問文に現れる場合、いわば語調を整えるものとして働いているように思われ、現時点では「へ」の意味・機能はよく分かっていない。このため例文4行目のグロスには?を付している。

また、「ガ」については、単純疑問文末に現れる例はあるものの(8)(9)、疑問詞疑問文の文末に「ガ」が現れる例はほとんど確認できなかった¹¹。

- (8) フタツ トメデヤルガ
futacu tomedejaruga
hutacu tome-te-jaru=ga
 二つ 泊める.INF-PTCP-BEN=SFP

「(一晩じゃなく) 二晩泊めてやろうか」 [話し手が聞き手に相談している] (2012)

- (9) ワート ムゲーニ キタベガ
waato mugeeni kitabega
wa=to mukae=ni ki-ta=be=ga
 1SG=ACC 迎え=ALL 来る.INF-PST=INFR=SFP

「私を迎えに来たんだろうか」 [談話の最中に救急車のサイレンが聞こえてきたので] (2012)

ちなみに、上の(8)(9)は独り言でも用いることができ、先の田附の分析の通り、聞き手に対する問いかけと言うよりは疑問（もしくは疑念）の表明に留まっていると思われる。

また、次の通り「ガ」も随意的な場合がある ((8)(9)は「ガ」を欠くと適格性が下がる)。

- (10) ナ イグ {φ/ガ}
na igu{φ/ga}
na igu{φ/=ga}
 2SG 行く {φ/=SFP}

「お前行く {φ?/か} ?」 (作例)

「ガ」の有無と文のイントネーションとの関連も考慮する必要があると考えられるが、例文のミニマルペアが少なく分析に着手できていないため、本発表では言及せずに留める。

7 平叙文の「ナ」「バ」「ガ」をめぐって

実は、文末詞「ナ」「バ」「ガ」は平叙文にも生起する。

- (11) ワ ヘア マンダ アダマ イヒチャーナー
wa hea manda adama ihicjaanaa
wa heba ma^ada atama isi-tera=na
 1SG CONJ まだ 頭 良くある-CONT=SFP

「それじゃあ私はまだ頭がいいね」 [年若い友人より早く木の名前を思い出せたので] (2012)

- (12) コゴロノゴリ ネグ スシ クッテ イーデバ
kogoronogori negu susi kutte iideba
kokoronokori ne-ku susi ku-te ii=de=ba
 心残り 無い-CVA 寿司 食べる.INF-PTCP 良い=COP.SEQ?=SFP

「心残りなく寿司を食べて、いいじゃない」 (2012 の例を加工：語順を整えた)

¹¹ ちなみに、疑問詞疑問文が埋め込まれている場合には、その埋め込み文の末尾に「ガ」が生起する。

- (13) ア ションボサ タノメバ イ ッチャーガ
a sjombosa tanomeba i ccjaaga
 a sjombo=sa tanom-eba i cu-tera=ga
 INTJ 消防=ALL 頼む-ADVC 良い と言う-CONT=SFP

「あ、消防に頼むと良いつて言ってるのか」[独居高齢者に代わり消防士が除雪する。初耳の話]
 (2012)

- (14) ア スッタ モンダダガ
a sutta mondandaga
 a sutta monda-n=da=ga
 INTJ そんな ものだ-NMLZ=COP=SFP

「あ、そんなものなのか」[「初めて知った」という気持で] (2012)

さらに、平叙文においてこれらの文末詞が共起し、連続することがある。ただし、無制限に連続できるわけではなく、次の例のように、「ガナ」「バナ」の形に限られる。

- (15) マイニズ カル フトア ウリニ イイズガナ
mainizu karu futoa urini iizugana
 mainizu karu huto=a uri=ni i=zu=ga=na
 毎日 買う 人=NOM 売る.INF=ALL 良い=DSC=DSC=SFP

「毎日 (パンを) 買う人は (売る側としても) 売りやすいのかな」(2011)

- (16) スグネグ ナッテルデバナ
sugunegu natterudebana
 sukune-ku nar-teru=de=ba=na
 少ない-CVA なる.INF-CONT=COP?.SEQ?=DSC=SFP

「(食料が) 少なくなってるじゃないの」[お菓子の無い幼少時は自宅の保存食を掠めて食べたと言う(16)の話し手に、盗みは見つからないのかと聞き手が尋ねた。それに対して「当然見つかる」と答えた直後の発話] (2012)

- (17) モ ヒトツ クッテミレバ イーデバナ
mo hitocu kuttemireba iidebana
 mo hitocu ku-te-mir-eba i=de=ba=na
 もう 一つ 食べる.INF-PTCP-みる-ADVC 良い=COP?.SEQ?=DSC=SFP

「もう一つ食べてみたらいいじゃないの」[柿好きにも拘わらず一個だけ食べて遠慮する聞き手に話し手が勧めている] (2012)

つまり、平叙文において、「ナ」「バ」「ガ」の間では、「ナ」は「バ」「ガ」のいずれとも共起可能であるが、「バ」「ガ」同士は共起することができない。また、他の文末詞と共起する場合、「ナ」は最右端 (より文末の位置) に生起する。ここから、文の周辺部にある文末詞は十把一絡げに扱えるものではなく、文末詞間にも何らかの意味的な程度差があることが分かる。さらに踏み込んで言うと、話者 (母語話者、準母語話者) であれば直観的に理解している筈であるにも拘わらず説明の難しい各文末詞の違いが、共起の可否や接続順序を手掛かりにすると見えやすくなるということである。

現段階で津軽方言の「ナ」「バ」「ガ」の差異を描出しようものとして考えているのは、中右(1994)や南(1993)のような階層意味論モデルである。中右による図を下に挙げる。

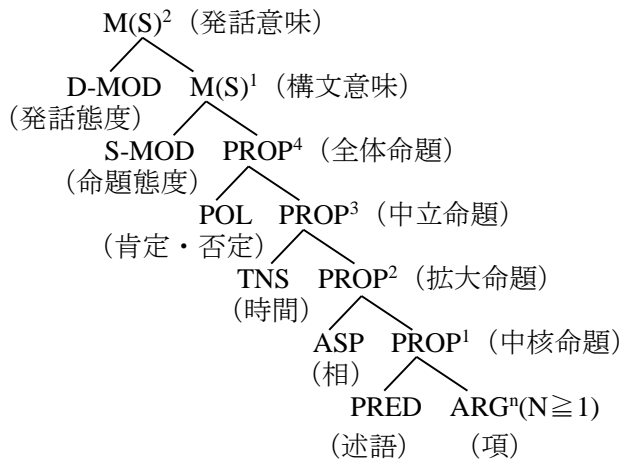


図 1 中右 (1994 : 442) の階層意味論モデル

上図の分類に倣うとすれば、まず当方言の「ガ」は疑問の表明（つまり話し手が自分で判断できない）や新規情報受容とも言うべき意味（「あ、そっか」）を表すことから、S モダリティ（命題態度：命題の内容に対する話し手の判断を表す）に分類される。加えて「バ」も、例(12)(16)(17)のように断定に類した用法をもつことから、S モダリティに分けることができるだろう。「ナ」は、最右端に現れる傾向があること、命題態度を表しえないことから、D モダリティが妥当であると考えられる。

まとめ

本発表では、津軽方言の文末詞の一部の「ナ」「バ」「ガ」の概要を示し、階層意味論によって文末詞を分類することを試みた。結果として、当方言の「ナ」は中右 (1994 : 442) の D モダリティ、「バ」「ガ」は S モダリティに属すると考えられる。

本発表で扱わなかった他の文末詞も共起関係や接続順に一定の傾向が見られることから、階層意味論による分析が有効であると思われる。「ナ」「バ」「ガ」も含めた密な分析を行う必要がある。

参考文献

- 井上優 (2006) 「モダリティ」小林隆・佐々木冠・渋谷勝己・工藤真由美・井上優・日高水穂編『方言の文法』シリーズ方言学 2. 137 - 179. 東京：岩波書店.
- 北山長雄 (1933) 「第八章IV終助詞」『津軽語彙』私家版.
- 木村英樹・森山卓郎 (1997) 「聞き手情報配慮と文末形式一日中両語を対照して一」大河内康憲編『日本語と中国語の対照研究論文集』東京：くろしお出版.
- 此島正年 (1968) 『青森県の方言』青森：津軽書房.
- 沢木幹栄 (1981) 「津軽方言における単純疑問と疑問詞疑問」国立国語研究所編『国立国語研究所報告 79 研究報告集 5』91-96.
- 渋谷勝己 (2004) 「山形市方言の文末詞バ：ヨと対比して」『阪大社会言語学研究ノート』6. 170 - 180.
- 菅沼貴一編 (1936) 『青森県方言集』青森：今泉書店.

田附敏尚 (2007) 「青森県五所川原市方言における文末形式『ナ』について」『国語学研究』46. 59 - 73.

田附敏尚 (2011a) 「青森県五所川原市方言における質問の文末形式—文末形式『ナ』と『バ』の用法と意味・機能—」『東北文化研究室紀要』52. 37 - 55.

田附敏尚 (2011b) 「青森県五所川原市方言における不定の文末形式『ガ』について」『国語学研究』50. 133 - 146.

東條操 (1938) 『方言と方言学』東京：春陽堂書店.

中右実 (1994) 『認知意味論の原理』東京：大修館書店.

藤原与一 (1982) 『方言文末詞〈文末助詞〉の研究 (上)』東京：春陽堂書店.

南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』東京：大修館書店.

附

凡例

例文の表記は次の通りである。ただし脚注の例文は紙幅の節約から2 - 3行目を割愛する。

1行目：音声表記 (カタカナ)

2行目：音韻表記

3行目：グロス (形態素ごと。機能や形態が分からない場合は POT? のように示す。動詞の活用形は現時点で分かっているもののみ明記する)

4行目：全文訳 (文脈から補った要素を括弧内に示す。話題や文脈は適宜角括弧で示す)

例文の出典の示し方

例文の出典は、次のような略号で例文の直後に示す。

(2011)：2011年に田舎館村で収録した自然談話

(2012)：2012年に田舎館村で収録した自然談話

(作例)：筆者の作例

音素目録

母音は附表 1 の5つを設定する。母音の長短は弁別的ではないと考えられる。ただし漢語、外来語はその限りではないようである。

附表 1 母音音素

i[i~i]	u[u~i]
e[e~i]	o[o]
a[a]	

子音音素は次の附表 2 に示す通り16の音素を設定することができる。

有声閉塞音/b,d,z/は、その直前に実現時間の短い同一調音点の鼻音 (homo-organic nasal) を伴い、^mb,ⁿd,^ɲz になる場合がある。ただし、母音間で/t,s/が有声化して生じる副次的な有声閉塞音は、直前に鼻音を伴わない。この ^mb,ⁿd,^ɲz を音素として認定するか否かについて、発表者は明確な意見を持

っていないものの、現時点では音韻的な表記においても用いることにしている。

附表 2 子音音素

破裂音	p	b	t	d	k	g	
鼻音		m		n[n~ɲ]		ŋ	
破擦音			c[ts~tɕ]				
摩擦音			s[s~ɕ]	z[z~ʒ]			h[h~ç~φ]
はじき音				r[r]			
接近音		w				j	

グロス一覧

ADVC : 副詞節	INF : (連用形に付した)	2 : 2 人称
ALL : 向格	INTJ : 間投詞	SEQ : 継起
CONT : 継続	NMLZ : 名詞化	SG : 単数
COP : コピュラ	NOM : 主格	3 : 3 人称
DSC : 談話標識	PST : 過去	- : 形態素境界
1 : 1 人称	PTCP : 分詞 (いわゆるテ形に)	= : 接語境界